

# 現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明 サイバーリテラシー研究所 代表

No.136 ケータイ30年

## スマホが唯一の情報端末になりつつある

日本に携帯電話が登場したのが1987年である。その後の機能拡張はすさまじいが、2010年代のスマホ（スマートフォン）普及が決定的で、「ケータイ」はいまや万人のツールとなつた。四六時中持つて回る小さなモバイル端末が、私たちの意識、感性をどう変えているのか、この機会にあらためて考えてみるべきだろう。

NTTが携帯電話サービスを始めたのは1987年4月だから、ケータイはちょうど30周年を迎えたことになる。そしていまケータイと言えば、スマホである。そのスマホが最近、世界レベルでインターネットにアクセスする端末としてパソコンを上回つた。

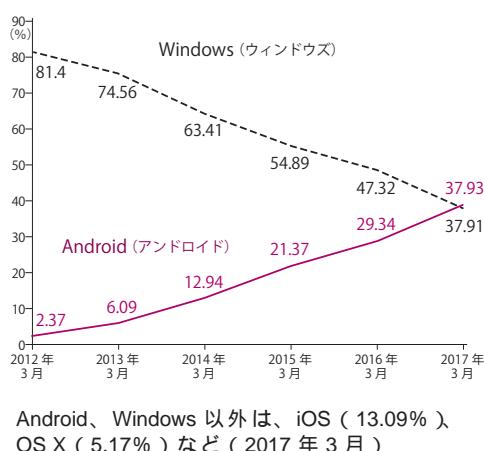
### アンドロイドがウインドウズを抜く

ウェブ分析の有力企業、スタットカウンターの今年3月期の調査によれば、インターネットに接続している端末の基本ソフト（OS）オペレーティング・システム（OS）のシェアで、グーグルのアンドロイド（Android）が37.93%、マイクロソフトのウインドウズ（Windows）は37.91%と、アンドロイドがはじめてウインドウズを凌駕した。

アンドロイドはスマホのOS、ウンドウズはパソコンのOS。これは長年、インターネットにアクセスするプラットホームとして君臨してきたパソコンがついにスマホにその場を譲つたことを意味

味する。「図」（\*1）

差はわずかであり、比較したのがトロチよど30周年を迎えたことになる。そして、実ユーザー数ではない点を考慮しないでいいが、図の年代別推移を見ると、スマホが急速に普及する一方でパソコン市場が縮小しつつある変化の激しさがよく分かる。



### 大学生のパソコン離れに危機感

NECパーソナルコンピュータは3月、大学生向けのノートパソコンを売り出した。若者のパソコン需要を喚起するため、女子大生と共同開発したらしく。発売記者会見における社長説明によれば、「12歳から19歳の若者でパソコンを持つていない人が約7割いる。大学生もつとも私が大学で教えていた10年以上前でも、大学生がパソコンを本格的に使い出すのは入学後だったから、その数値がそれほど変化したとは思えないが、肝心なのは、現在では、パソコンを使っていない若者もすでにスマホは使っている」ということである。

パソコンで初めてデジタル機器に接して、インターネットの使い方を学んだうえでケータイを使うのではなく、ケータイでインターネットに慣れ親しんだ若者が大學生になり、あらためてパソコンの使い方

などで、アメリカ、ヨーロッパなど先進国ではまだウンドウズをはじめとするパソコンOSのシェアが高い。日本ではウンドウズが全体の55%を占め、スマホではアンドロイドよりiOS（アイフォンのOS）のシェアのほうが高い。

やの・なおあき／1966年朝日新聞社入社。79年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88年『ASAHIパソコン』初代編集長。『月刊Asahi』編集長の後、95年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97年総合研究センター主任研究員。2002年朝日新聞社退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03年4月から06年3月まで明治大学法医学部客員教授。06年4月から情報セキュリティ大学学院客員教授。07年4月から12年3月までサイバーユニバーシティIT総合学部教授。著書に『インターネット術語集』(岩波新書)『サイバーリテラシー概論』(知泉書館)『総メディア社会とジャーナリズム 新聞・出版・放送・通信・インターネット』(知泉書館、2009年度大川出版賞受賞)など。最新刊『IT社会事件簿』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)では、ITの進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。右写真



【5分間のサイバーリテラシー公開授業】 2014年1月から、オンライン無料講座の仕組みを利用し、「サイバーリテラシー」に関する一コマ5分間の授業を公開中。「IT社会を豊かに生きるために～社会編」は「サイバーリテラシー」とは、「情報倫理について」「Web2.0 とは何だったか」など、「IT社会事件簿」を読む～事件編」は「遠隔操作ウイルスで誤認逮捕」「米政府による大規模諜報活動告発」東日本大震災とソーシャルメディア」などのタイトルで公開中。サイバーリテラシー研究所のサイトからアクセスできる。

サイバーリテラシー研究所 <http://www.cyber-literacy.com/>

以前、この「ラム」でもパソコンとスマートフォンは別のメディアだということを書いたけれど、私は、紙→パソコン→ケータイというメディア変遷の歴史を振り返るとき、精神に対する影響という面では、紙からパソコンより、パソコンからケータイへの変化のほうが大きいと考えている。<sup>(\*2)</sup>

一本を読む行為を経てパソコンのデジタル画面を見るのと、本というメディアをほとんど経ずにいきなりスマートホンをいじり、その延長上でパソコンをいじるのであるで違うというべきである。

## スマート時代は何をもたらすか

パソコンの画面は大きく、雑誌や書籍を読むのと同じように、長い文章も読め

インターネット利用ばかりでなく、私たちの情報活動そのものが大きくスマートに依存することの意味は大きい。活字離れが言われて久しいが、いまでは情報端末はスマートだけ、若者たちは（そして大人も）、もはや本や雑誌を読む機会は減り、パソコンもいいらない。スマートだけでニュースを読み、買い物をし、友だちと「ミュー」ニケーションする。

を習う。パソコンをとくに学ぶ機会がないひとは、ほとんどパソコンには触れず、インターネットにアクセスする。

る。パソコンというメディアはデジタルだが、文章を読むという点では、書物を読むのとあまり変わらなかつた。ところがスマートの画面は小さい。ウェブを閲覧するブラウザーもスマート用により簡略化してデザインされているから、長い文章を読むには適しない。必然的に、人びとは長い文章を読み書くこと自体をしなくなりつつある。これは恐ろしい。

東京新聞のケータイ30年の特集記事（4月15日付）で、自らは携帯電話を持つていないう作家の田中慎弥が「携帯を使うにしても、本は読んだ方がいい

メールとかSNS、LINEって、非常に短いセンテンスで「ミコニケーションしなければいけないわけです……短い言葉を養うためには長いセンテンスを吸収する必要がある」と、ケータイ時代だからこそ長い文章（の小説）を読むことを勧めている。続けて、「中高生が本を読みたくない」とすれば理由は一つで、周りの大人が読んでいないから。その頂点が政治家などで、どう考へても本を読んでいない。彼らは「言葉を全然知りません」とも。スマホ時代は私たちをどこへ連れていくのだろうか。



道具変われば見えるものも違う

イラスト kkkkkkkkkkkkkkkoooo!!!!

( \* 2)2016年6月号「メディアとしてのスマートフォン」。バックナンバーは以下のURLで見られる。

アフターは以下の URL で見られる。